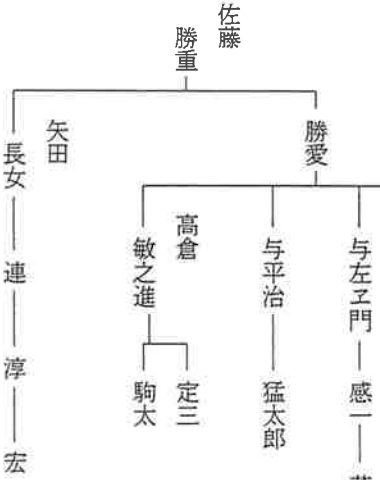
勝太郎（別府町）石松七藏（豊後国）松本為平（不明）阿部駒吉（豊岡村）の六名が参加した、その他に参加の同志は大分あった様である」と。

本文、登場人物の関係を図示する。関係者以外は省略



別府の伝説（一）
鎮西八郎為朝と別府

故　掘　藤吉郎

大蛇に噛みついた忠犬山雄の首

標高一、五八三メートルの由布岳の北尾根の原始林を奥由布といっている。この密林のなかに鎮西八郎為朝に関する伝説がたくさん生長している。奥由布といわれる密林は、今でも昼なお暗しといったところで、うっそうたる巨木に覆われ鮮苔類は岩石を包み登山者憧憬の的となっている。この大密林内で久寿の昔の物語として為朝についての伝説がある。

崇徳院の御所で藤原入道信西の恨みをかった為朝は、父の為義のすすめで豊後の国に逃れた。為朝の家来の須藤九郎重季を召しつれている。遠縁にあたる羽室に居を構えている尾張権守季遠の家に落ち着いて食客となっていた。

ある日、単身由布岳の密林に分け入り狩猟をやっていると二匹の狼が噛み合っている。見ると兎の取り合である。弓の先で狼をはねると二匹とも左右に転び頭を垂れて尾をふっている。これを手なづけて行くうち、一羽のキジが飛び出した。咄嗟に弓を引いて矢を放つと、キジは四十間も先で音を立てて地に落ちていった。為朝は木の根、岩角を這ってキジを拾おうとすると茂みの中からひとりの男が現れてきた。

「そのキジは拙者が落したものじゃ」

為朝は腹立ち気味で

「何をいい居る。確かに矢がキジの胴を串刺しにしているのが見えぬか。たわけ者が」。件の男は、

「拙者は八丁礫（つぶて）の紀平治と申す者、石礫の狙い撃ち百発百中、八丁までの物は違わず落す。キジの頭を狙った、見分けられよ。骨は微塵の筈如何でござるか」

成程、キジの頭から鮮血が滴っている。為朝は、この者唯者ではないと自分の名を明かし丁寧に挨拶して山道に迷ったことと狼を二匹手なずけたことを話した。紀平治も意心して為朝であることを知り、勇将の家来になることは拙者の誉れと主従の約束をして山を二人して下り柚富郷（今の湯布院）の紀平治の宅に招じ入れて憩い、紀平治の妻八代のもてなしで栗飯や猿酒を馳走になった。季遠の家に帰りついたのは、もう日も西に入った後であった。

引きつれて帰った狼は山雄と野風という名をつけて可愛がったので、為朝の云うことをよく聞くようになっていた。こんなことがあって久寿二年も暮れ、春の暖かい日に山雄を連れて由布岳の密林へと狩りに出た。今日の供は須藤九郎重季である。

歩けど歩けど獲物は出ない。疲労は増すばかり、ついに眠るともなく大木の下でうつらうつらとした頃、山雄が声高く吠えては為朝の行騰（むかばき）をくわえて引くのである。

「主の恩も知らず吠えたてるこの犬奴が」

重季は怒って鞘を払って首を切ってしまった。突然、山雄の首は空高く飛び上がった。見あぐれば大木の上には大蛇が、しかも大蛇の喉には犬の首が咬みついて離れない。鮮血は滴ってどっと地響きがして大蛇とともに落

ちてきた。

大蛇は為朝主従を呑まんとして居たのであろう。落ちた大蛇は刀で刺し通して退治してしまったが、時一天俄に掻き曇って電光が閃き雷は鳴り響いて落雷し、重季の脳は砕け全身黒焦げとなって死んでしまった。

重季を亡くして呆然としているところに紀平治が心配して走ってきて、この有様を見て驚いた。それから二人して重季と愛犬山雄の二つの屍を埋め杉を植えて懇ろに「亡魂生天脱苦与楽」と唱えて山を下りようとした。すると、松の枝に鶴が止まっている。紀平治は得意の八丁礫で射ち落とそうとしたとき、為朝はこれを止め、重季と愛犬のため放生会をしようと鶴の生命に差支え無いところを狙って射落としてみれば、足に「康平六年三月甲酉源朝臣義家放」と文字を彫った黄金の輪がついていた。九十八年前に放した鶴が豊後の由布岳まで来ていたのである。しかも、「余の手に入るとは義家の神霊の導きであろう」と喜んで早速家に帰って自ら餌をやり水をあたえて可愛がった。

この鶴が、後年肥後の国阿曽三郎平忠国の愛玩する猿が姫の腰元を咬み殺して、文殊院の塔上に逃げたのを飛び立って嘴で突き殺して為朝に報恩し、為朝はこのため白縫姫を約束通りに妻に貰いうけたと云われている。

由布岳の原始林には久寿の昔に作ったという犬の塔という鎌倉形式のものが現存している。重季と犬の供養のために植えた杉は大杉となって天を摩していたが切られてしまった。その切り株には畳四枚を敷くことが出来る巨大なものであり、為朝の杉と言い伝えられている。密林中の北の堀というところには、為朝が築いた石垣の矢陣場も残っている。その下手の杉林中には為朝の　力水と呼ばれる清冽な湧き水もあり、狩りの度に為朝がこの水を飲んで大力無双になったのだという。奥由布飯盛山にも為朝の抜け穴（風穴）がある。恐ろしいまでの洞窟であるが、伝説によると、ここから穴を掘りぬいて阿蘇の平忠国の居城まで続かせる筈であったとも語られている。

四十三貫目張りの弓を射る為朝

地獄巡りの観光道路を柴石温泉から鉄輪に抜ける中間に、鎮西八郎為朝の塚ケ城跡という史蹟地がある。この道路から東にかけての地が羽室塚ケ城のあったところ、為朝十二妃の塔なども現存し、築城の以前からあったという多恩寺遺蹟や姫山メンヒルなどあり、史蹟と伝説にとんだ地である。

久寿二年四月、大神惟敏父子や筌門の荘司貞継などを伐ち従えた源為朝は羽室の山上に城を築き、付近の豪族の婦女子十二人を人質にし自分の妃として遊び、暇があれば弓術の演練に励んでいた。城には温泉があり、流れがあって田圃もあって兵糧の欠乏も覚えず攻めるに難く守に易い要塞であった。

後には鶴見、十文字の連山を、前には速見灘一帯から高崎山の風光を眉宇の間に眺める岡阜である。この城の大松の元に家臣を従えた鎮西八郎は身の丈六尺八寸の偉丈な体を直立して、別府の浜辺を手をかざして見つめている。紺地に金龍を縫い取った直垂に身を包み黒い鷲の羽の矢と、背丈の倍もある四十三貫目張りの大弓を左手に軽々下げた姿は武威そのものである。

小波は淡雪のように別府の渚を夕陽を浴びて寄せては返している。渚には大きな老松がくっきり見える。

「紀平治試してみようか。いつものように自らの弓勢を」「あの大松の的、美事にそれを射抜くなら、九国の統一も間違いのない事と思われますのみならず源家のため頼もしいことで御座います」

渚のこの大松には的が立ててある。かすかに白く見えている。豪弓をとり直すと太い矢をつがえたその顔には、生来の剽悍さが見えている。じっと引き絞った瞬間、為朝は目を閉じ弓矢八幡を念じているのである。

かっと見開くと共に矢はうなりを生じて飛んで行く。やがて、大松の的は地に落ちた。確かに命中である。こうした弓の演練が来る日も来る日も続けられて行く。飽きれば大松に弓をかけては暫時休憩するといった調子であった。為朝の豪弓の噂は九州はおろか日本六十余州に広がり、為朝に叛旗をひるがえす剛の者もなく鎮西の勇将として恐れられるようになっていた。

時代は流れて後々の里人は的を掛けたこの松を的掛けの松と呼び、付近一帯の海辺を的ケ浜と名付け、羽室の

大松を弓掛けの松と呼んだ。的掛けの松の枝のくねっているのは的の重みで曲がったものであり、弓掛けの松の枝の垂れているのは四十三貫目張りの弓の重さで自然に垂れたのであると言い伝えられている。

的ケ浜付近は大昔、瓜生島や久光島があり船の出入りの海門であったので、後々此処に寺を立てこの地名を冠して海門寺と称したといい、一帯を海門寺浜と地名に付けたのである。

為朝に切られた大岩

明礬温泉場より兎落の険路をあえぎあえぎ登ると、内山からガラン岳に走る尾根の峠にでる。塚原乗り越えという峠で見晴らしのとてもよい所である。

付近には硫気孔がありそのまわりには珍しいミズスギの群落があり、植物採集の人々を喜ばしている。ここから西へ下ると三百メートルの所の路傍に真二つに割られた大きな岩がある。為朝伝説で有名な岩で、見るからに美事な割れ方をした岩である。

久寿二年も暮れに近い師走、羽室の城をでた鎮西八郎為朝は今日も弓矢を持ち腰には九尺の太刀をたばさんでいる。いつもの狩り場由布岳の密林へ向かうのである。供は、八丁礫の紀平治である。湯山の険路を越えて塚原の湯から由布の北側を登り、昼なお暗い楓やもみやごまの木などの大木の密林を分け入り、獲物を求めたがどうしたものか羽ばたき一つない静寂の気一杯の山気がせまるのみである。

供の紀平治も、獲物が出れば礫の名人の腕前を主人に見せんものと手頃の小石を五つ六つ懐に入れて、為朝の愛犬山雄の後からついて行く。飛び立つものはとるに足らない小鳥ばかりである。泰山鳴動して小鳥一羽、今日は何たる悪日かとかこつ為朝の顔は不興の色に塗りつぶされているかのようである。

「紀平治帰ろう」「では御供仕ります」

為朝の弓矢を持った供の紀平治は、この荒武者為朝、このままではすむまい、すむはずもないまた何かしでかすのではないかと供をしながら本村の部落も過ぎ、塚原の湯場に一休みした。

ガラン岳の中腹からもうもうと白煙が亜硫酸ガスの不快な臭いをまじえて主従の鼻にプンと来る。為朝は不機嫌のようである。

「紀平治、為朝のこの腕が鳴り居るわい」「さればで御座ります」

主従二人は連れ立って帰りを急いで塚原の峠にかゝる手前まで来た。為朝は破鐘のような声を張り上げ、

「紀平治みておれ、為朝が腕の程を試し見らん」

道端には高さ十五尺の大岩が一つつくねんと座っている。太刀を抜いた為朝は九尺の業物を大上段にふりかぶり「えい」と気合もろとも打ち下ろした。不思議や大磐石は真二つに切り割られ中央に大きな割れ目が出来てしまった。為朝の不機嫌も直ったらしい。

「紀平治帰ろう」

足を早めて兎落の難路を一気に下り羽室の館に帰りついた。

館前には、紀平治の妻八代や一族郎党の出迎えをうけて、雪の深々と降る庭を眺めながら酒盛りがはじめられた。為朝は大機嫌である。

「紀平治飲めよ、遠慮はいらぬぞ」「八郎殿のお手の内、今日の塚原での御力量の程源家のためたのもしゅう存じ奉ります。九国の統一も目の当たり心丈夫なことに御座ります」

夜のふけるまで主従二人は飲み続けた。

為朝の剛勇をほめた後の人々は塚原の岩石を為朝の刀割岩と呼び伝えた。

為朝に殺されて岩になった山猫

別府八湯の一つ明礬温泉場を抜けて十文字原の高原に行く道の左側に、長く尾根を引く山がある。猫岩山と呼びなして高さ八百五十メートル、其の麓は湯山キャンプ場となっている。バスはこの湯山山麓を快適な音をたてて十文字原から安心院に通っている。付近一帯の景色は実に雄大で原の突角には展望台があり、此処からの別府市街と別府湾の眺めはじつに壮大そのものである。

十文字原の道は往昔御上使道といって、宇佐郡の佐田や安心院に行く豊前宮道であった。森藩主久留島康親が

参勤交代のために作った道で玖珠の森から豊岡に出る道とが原中で十文字に交差するので、寛永十一年頃からこの原を十文字と呼ぶようになったそうである。この十文字の猫岩山についてつぎのような伝説が語られている。

羽室の城の奥庭の縁先には、為朝が如才ない格好であぐらをかいている。今朝も土民の主だった者、三四人が土下座し為朝に哀願している。

「昨日の夕方、佐田の村から来た旅人が湯山に住むといわれる山猫のため喉笛を食い切られて赤に染まって原のなかに殺されていました。それは見るも無残な死にざまです。つい二三日前の夜も遍路の婆が可愛想に山猫にやられたし、わし等も落ち着いて仕事も出来ぬ、これでは官道の往来も安心して出来ぬ。百姓の手で何としても始末におえぬ。お殿様にお願いするより手のないこと、厚かましいとは思いますが、わし等の気持ちをくんでお助けください。お殿様の御武勇にすがるより他に道もございませぬ。このとおりでございます。」

両手を合掌して哀訴するのである。

「畜生の分際として諸人に危害を加えるとはもっての外、民百姓の安堵のため余がその山猫とやらを退治て進ぜよう」

それから或る夜、為朝は単身手慣れの大弓を持ち羽室の城を家中の者にも告げずに出て湯山へ野道を急いだ。星とてない暗黒の山路、枯れ尾花が風にゆられて棕々と鳴っている。

「人の足音を聞いて山猫のやつもう出そうなものだが、この為朝の威力を恐れて出てうせぬか」

おりから前方路端の雑木林の中に人玉のような青光りする怪しい輝きが左右に二個爛々として為朝に迫ってくる。さては怪猫御座んなれと咄嗟に弓に矢をつがえ満月のように引きしぼる。弦を放れた矢は山猫の額に一発一中、一声恐ろしい悲鳴をあげて一目散に山の峰へと走って行く。後をつけ暗やみをすかして見ると今まで無かった頂上に猫がうずくまった形をした大きな岩が出来ていて、岩には鮮血がしたたっている。

この岩が為朝に射殺された千年も生き続けたという金色をした山猫の死骸が化けたのであるといわれ、この山を猫岩山と呼びなしたのである。